

第4学年1組 国語科学習指導案

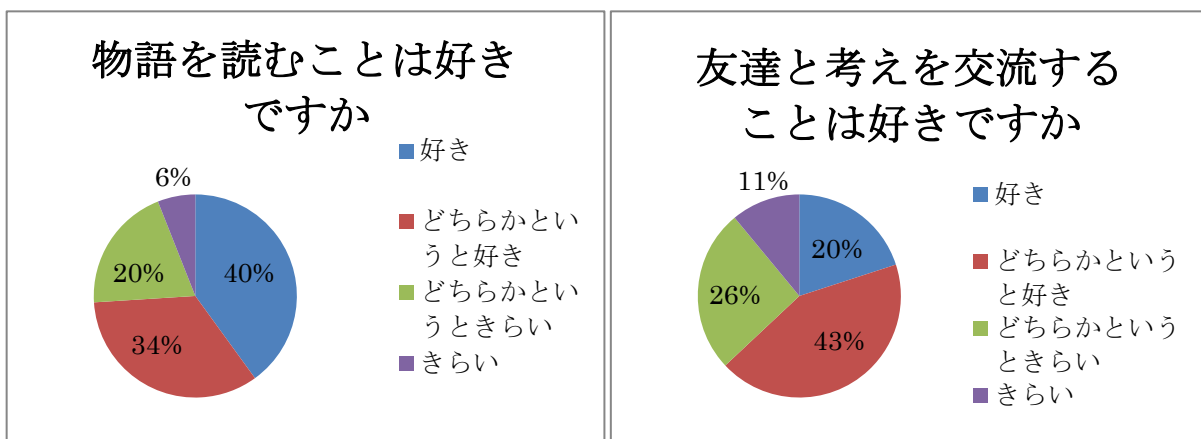
平成26年11月13日（木） 第4校時
活動場所 4年1組 教室
児童数 男子19名 女子17名 計36名
指導者 川口市立新郷南小学校 教諭 小林 恵

1 単元名・教材名

登場人物の心情を考え、音読発表会をしよう 「ごんぎつね」

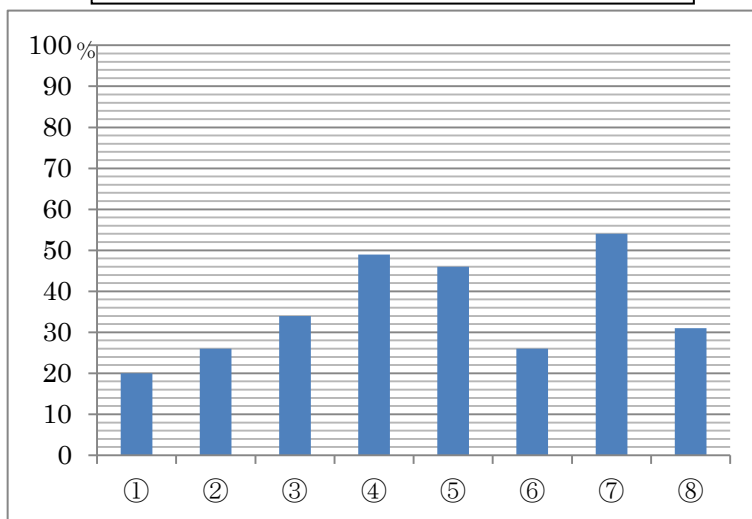
2 児童の実態と本単元の意図

本学級の児童は、国語科の学習に意欲的に取り組んでいる。6月に実施したアンケートでは、約70%の児童が、「国語の学習が好き」と回答している。「物語を読むこと」については、74%の児童が、「好き」「どちらかというとき好き」と回答している。また、「友達と考えを交流すること」については、63%の児童が「好き」「どちらかというとき好き」と回答している。



また、国語科の学習の中で、「自分ができていること」としては、回答は下記の通りであった。

国語について、自分ができていると思うこと



- ①自分から発表すること
- ②ノートなどに自分の考えを書くこと
- ③友達と考えを交流すること
- ④進んで読書をする
- ⑤すらすらと音読すること
- ⑥登場人物の気持ちを考えて、工夫して音読すること
- ⑦書いてある内容を正しく読み取ること
- ⑧書いてあることから、想像して読むこと

このことから、児童は国語の学習には意欲的であるが、「できた」「わかった」という達成感を感じる学習経験が少ないことがわかる。また、読むことについては、書いてあることを正しく理解することは約半数の児童が「できる」と回答しているが、そこから想像を広げて読むことにはつながっていない。さらに音読については、すらすらと読むことはできるものの、登場人物の気持ちなどを表現するために、読み方を工夫することには苦手意識をもっているようである。

本教材「ごんぎつね」は、心の通い合いをテーマに書かれた物語文である。兵十に対する思いが変容していき、なんとか心を通い合わせたいというごん、それには気付かず、ごんを銃で撃ってしまう兵十、この二人の行動や心情の変化を中心に、物語の世界を味わわせていきたい。これまで児童は、「白いぼうし」「一つの花」などの学習を通し、登場人物の行動やそこに表れている思いを読み取る力が身に付いてきている。この教材を通し、さらにその読みを豊かなものにしていきたい。

本単元では、言語活動として音読発表会を設定している。音読に生かすために、登場人物の心情を読み取るという目的意識をもって読み進めることで、読みがより豊かに広がり、深まるものと考ええる。これまでの学習での音読では、どの会話文も同じ調子で読んでしまったり、速さや強弱など、心情を考えた読み方を工夫したりすることができていなかった。音読発表会のために読み取ることで、児童が考えたことを音読の工夫へと結びつけ、生き生きと表現できるようにしていきたい。

読みの学習活動の構成として、ペアで話題（学習課題）について対話し、全体で交流したのち、読み取ったことを音読に生かすという形を中心に進めていく。対話を行うことで、誤読が減り、自分の考えが変容したり、確かなものになったりするというよさがある。話し合ったことを全体で交流することで、互いの考え方の共通点や違いに気付かせていく。話題の提示の仕方を「気持ちを考えよう」ではなく「～のはなぜか」など、対話の目的に具体性をもたせる提示をしていく。根拠を示しながら登場人物の心情を想像させることで、叙述を基に豊かに読む力を養っていきたい。

3 単元の目標

- (1) 学習したことを基に、自分の読みと友達の読みを比べながら進んで物語を読もうとしている。
(関心・意欲・態度)
- (2) 場面の移り変わりや情景・登場人物の心情を、叙述を基に想像しながら読むことができる。
(読むこと)
- (3) 修飾と被修飾との関係を理解し、文章を読むことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 研究主題との関連

研究主題「豊かな学び合いをめざして～自分の思いを伝え合う児童の育成～」

(「読むこと」を中心として)

◎目指す児童像

- ・言葉に関心をもち、正しく使おうとする子
- ・叙述に基づいて内容を理解したり、筋道立てて考えたりすることができる子
- ・言葉を通して、自分の思いや考えを表現したり、友達の考えを理解したりすることができる子

仮説 1	身につけさせたい力を明確にし、単元を貫いた言語活動を工夫すれば、自分の思いを伝え合う力が育成されるであろう。
手立て	・身につけさせたい力を明確化・焦点化した単元構想 ・単元を貫く言語活動を設定し、読むことの相手意識・目的意識をもたせる。 ・設定した言語活動の中で、自分の思いや考えを伝える活動を組む。

【本単元での具体的な手立て】

- ・単元の終末に音読発表会を設定した。「2組の友達に向けて」「登場人物の心情や、場面の様子を豊かに表現するために読む」という相手意識・目的意識をもたせ、学習を進めていく。

仮説 2	一単位時間の中で見通しと振り返りを位置づけた学習過程を設定し、学習課題を明確に提示すれば、自分の思いを伝え合うための基礎的・基本的な力が身に付くであろう。
手立て	・課題提示の方法と評価方法の工夫（考え、書く活動の重視） ・思考や判断を促す発問や指示の具体化 ・話し合い活動の学習形態の工夫

【本単元での具体的な手立て】

- ・本時のゴールがわかりやすいよう、学習課題を「～のはなぜか」「～はどのように読んだらよいか」など、結論の出る形で提示する。何がわかれば、読み取ることができたといえるのかを明確にし、学習活動を展開していく。
- ・本単元では、ペアでの対話を中心に読みを広げたり、深めたりしていく。対話の「話題」として学習課題を提示することで、何を考えられたらよいのかが児童にとって明確なものになるようにする。また、対話をすることで、明らかな誤読が減り、友達の考えとの共通点や違いに気付いたり、自分の考えが確かなものになったりするよさがあるものと考ええる。

5 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・学習したことを基に、自分の読みと友達の読みを比べながら進んで物語を読もうとしている。	・場面の移り変わりや情景・登場人物の心情を、叙述を基に想像しながら読んでいる。 ・読み取った内容を基に話し合い、互いの考えの共通点と相違点に気付いている。 ・読み取ったことを基に、抑揚や間の取り方を工夫して音読している。	・修飾と被修飾との関係を理解し、文章を読んでいる。
学習活動に即した評価規準	①物語のあらすじをつかみ、心に残ったことを中心に感想を書いたり、学習の見通しをもったりしようとしている。 ②互いの考えの相違点や共通点に気付きながら、交流や対話をしようとしている。 ③叙述を基に、自分の考えを表現しようとしている。 ④読み取ったことを基に、音読の仕方を工夫したり、友達の音読の良さを見つけようとしていたりしている。	①叙述を基に、ごんや兵十の行動や心情を読み取っている。 ②言葉や行動の叙述を基に兵十とのつながりを持ちたいごんの気持ちや兵十への思いの強まりを読み取っている。 ③ペアでの対話から、互いの考えの共通点と相違点に気付いている。 ④読み取ったごんや兵十の心情を基に、よりよい読み方を考え、工夫して音読をしている。	①場面や行動の様子を表す修飾語を理解して、文章を読んでいる。

6 指導と評価の計画（全 14 時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	・全文を通読し、あらすじをつかむ。 ・ブックトークをする。	・物語の構成、登場人物 ・心に残った場面、疑問など ・新美南吉の作品（並行読書）	アの① ・発表の様子やノートの観察
2	・学習計画を立てる。	・心に残った場面、疑問などの感想交流→学習課題	アの①、② ・発表や交流の様子やノートの観察
	単元の学習課題 読み深めたことを生かして、音読発表会をしよう。		
		・音読発表をするための読み取り	

3	・（１の場面）ごんはどんなきつねなのか読む。	・ごんのしたいはずら、行動 ・兵十に対する行動	アの②、③、④ エの①、②、③、④ オの① ・発表や交流の様子やノートの観察 【学習形態】 ・一人読み ・ペアでの読み・対話 ・グループでの交流 ↓ ・音読
4	・兵十のおっかあは、うなぎが食べたかったのか読む。 ・兵十は、本当に「おれと同じ」なのか読む。	・兵十に対するごんの思い	
5	・ごんが兵十へ持っていた物の変化を読む。	・兵十へ持っていた物の変化 ・ごんの心情の変化	
6	・ごんは何を望んでいたのか読む。	・兵十に対するごんの思いの変化 ・心情を考えた音読の工夫	
7	・ごんはどんなきつねなのか読み深める。	・ごんの心情	
8	・兵十は、ごんをどう思っていたのか読む。	・ごんと兵十の立場や心情の違い	
9	（６の場面） ・次時の対話の柱について、一人読みで深め、シートに書く。	・兵十の行動の理由や心情	エの① ・発表や交流の様子やノートの観察
⑩ 本 時	・「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」は、どのように読んだらよいか考える。	・兵十の行動の理由や心情 ・音読の仕方の工夫	エの③ ・対話の様子やノートの観察 ・音読練習の観察
11	・新美南吉の作品を読み比べ、感想を交流する。	・作品を読んでの感想 ・作品のよさ、好きな場面	アの② ・発表や交流の様子やノートの観察
12 13	・音読発表会に向け、場面を決めて練習をする。	・これまで読み取ったことや叙述をもとに、音読練習 ・様子を表す言葉（そうっと、じっと、ぐったりと など） 強弱、抑揚、間の取り方	エの④ ・練習の様子、評価シートの観察
14	・音読発表会をする。	・場面ごとの音読 ・工夫した点やよいところの発表	アの④ ・発表の様子、シートの観察

7 本時の展開（10/14 時間）

（1）目標

叙述を基に兵十の心情を想像し、対話を通して互いの考えの共通点や違いに気付くことができる。

（2）評価規準

ペアでの対話から、互いの考えの共通点と相違点に気付いている。（読むこと）

（3）展開

学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫	時間
1 学習課題を把握し、見通しをもつ。	・ 前時までの学習内容 「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」は、どのように読んだらよいか。	○ここまでの学習や宿題でも、「ごん、おまいだったのか」の台詞は読まないでおく。 ○兵十のこの台詞を、断定として読むのか、問いかけとして読むのかを、対話の柱を通して考えられるようにする。	2
2 ダウト読みをする。 教科書を閉じて教師の音読を聞き、間違いを指摘する。	・ 場面の様子 ・ 登場人物の会話や行動	○対話の際の視点となる叙述を中心に、意図的に間違えることで、児童にとらえさせる。	7
3 学習課題について、柱をもとに話し合う。 （1）ペアで対話 （2）全体で交流	柱1：兵十は、なぜかけよってきたのか。 柱2：兵十は、なぜびっくりしたのか。 柱3：兵十が、いつもくりをくれていたのはごんだとわかったのはいつか。	○それぞれの柱についての自分の考えを、前時でノートに記述しておく。それをもとに、教師がペアを組む。 ○柱3がいつかによって、兵十の台詞が問いかけの言い方になるのか、確信をもった言い方になるのかが変わってくる。 ○友達のいい意見や、自分の考えの変容など、ノートにメモさせる。 ○全体での交流では、どれが正答かを決めることはせず、話し合ったことを音読に生かすことを伝えるようにする。	28

		評価場面 <学習活動に即した評価規準> エの③ <評価方法> ・対話の様子やノートの観察 ・音読練習の観察 <手立て> ・前時に記述した内容に補助発問を教師が記入しておき、それについての自分の考えを伝えるように声かけする。 ・柱3まで十分に対話を深められた児童には、「二人の心は通じ合ったのか」を考えさせる。	
4 話し合ったことを基に、ペアで音読する。	・兵十の心情に即した音読の工夫 「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」	○話し合ったことから、問いかけの言い方なのか、確信をもった言い方なのかを考えて音読させるようにする。 ○工夫して音読している児童を、ペアの児童からの紹介という形で全体に紹介し、音読発表会への意欲をもたせる。	7
5 次時の学習内容を知る。	・新美南吉の作品を読むこと	○作者の作品のよさについて考えることを知らせるとともに、音読発表に向けての見通しをもたせる。	1

8 板書計画

音読	兵十が、いつもくりをくれていたのはごんだとわかったのはいつか。	兵十は、なぜびつくりしたのか。	対話	兵十は、なぜかけよってきたのか。	「こん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」は、どのように読んだらよいか。	挿絵	ごんぎつね	新美 南吉
----	---------------------------------	-----------------	----	------------------	--	----	-------	-------